

交友歌壇

選者 三枝 英夫

さくら散る

川口 政男

今は亡き人を偲びてさくら散る
千鳥ヶ淵の夕景に佇つ

春宵に散りいそぐ花惜しみつつ
桜吹雪の田安門出づ

「サクラチル」の電報受けし遠き日を
転機となして喜寿を生き来し

同窓会

吉岡 輝夫

大方の恩師は鬼籍の人となり
同窓会に晩年を知る

酪農にいそしむ友は逞しく

万力のごとき握力をなせり

マドンナは美しく古い小言にて

玄孫が二人と告げて笑ひぬ

磐梯山

秋葉 雄愛

引揚者君が身ひとつに下船せし
仙崎港は今ただに静もる

つかのまの梅雨の時間の碧空を
突き響ゆる磐梯の山

さみどりの磐梯山の裾ひろごりて
夕光のさす湖へと続く

昭和は遠し

藤野 周三

出征のうからを馱に送りたる日も
朧なり幾たびの春

健やかに老いむと語れる友は亡し
さくら吹雪の春はめぐれど

特攻の兵に憧れ見上げたる
桜もおぼろ昭和は遠し

台湾万葉集

古川 公毅

台湾に歌人かくも多かりき

「台湾万葉集」を心し読めば

終戦で国籍変りし人々が
異国語駆使し詠み継ぐ短歌

八田興一氏夫人の入水悼みたる

傳彩澄氏の短歌を見付く

二〇〇九年晩春

山崎 照雄

家族らを背負ふ重荷もとうに消ゆ
名刺持たざる長き歲月

野の果ての人に向ひて話すごと
大声交す同窓の友

新型のインフルエンザ蔓延す
深まる憂ひ迫る不気味さ

カワセミ

桜井 栄一

瑠璃色の光を引きてカワセミが
真つ直ぐに飛ぶ川面かすめて

霜柱長く伸びたる畦道を
ザクザク踏み分け里山に入る

冬らしき風吹き荒ぶ夕暮に
赤城おろしのふるさと偲ぶ

蕎麦を打つ

石綿 昌男

蕎麦打つと棚から鉢出し蕎麦粉出し
前掛けをして頭巾をかぶる

お父さんの蕎麦が一番おいしいと
妻の言葉で今日も蕎麦打つ

細い蕎麦太い蕎麦とが混ざり合ふ
見た目より味われの打つ蕎麦

つれづれ

三宅 稔

旧玉ノ井

山口 昭義

神田川

高橋 和雄

逝きし友

三枝 英夫

雑草の力にたとえ生き来しが
今芝に這う雑草に負ける

何となく荷風に会へる心地して
「旧玉ノ井」 のとある駅に立つ

局地的豪雨にたちまち神田川の
水位上昇サイレンの鳴る

君はいま黄泉のいづへを旅しむ
逝きて十日目実感湧かず

庭の中菜の花終り後始末

しみじみと公序良俗思ひをり

雑踏の歌舞伎町の夜にひとり食む
防災宿直のわれは夕餉を

逝きたれば君は来世のわが先輩
まだまだ煩惱の虜囚ぞわれは

ごめんごめんと云いつつ倒す

悲しき事件続くこの世に

神田川に待ちわびてゐし鮎の影
見えてときをり腹を光ら

絶筆となりし手紙を読み返し
覚悟の言葉拾い読むなり

ハイキング当日よりも計画を
立てる作業に楽しみのあり

遠き日に共に務めし仲間より
懇親会の案内を受く

米寿の父

狐塚 七重

さくら

木宮 進

三ヶ島餞子歌碑除幕式

河野 喜助

米寿の父

狐塚 七重

宵闇にライトアップの光浴び
我に迫れるはなの妖しさ

小宮小六年生の序幕にて
陰子の歌碑のお披露目はいま

いつ死んでも良いと言ひつつ
薬飲む米寿の父の食後の慣ひ

風に舞う桜の花の花びらが

「筏組む木の音冴えて…」刻まれし
歌の明るさ歌のかなしさ

港町は紅殻色に夕焼けて
やがて沖より今日を閉ぢゆく

川面を覆い銀河のごとし

歌の明るさ歌のかなしさ

港町は紅殻色に夕焼けて
やがて沖より今日を閉ぢゆく

去年の春上野の山で見しさくら

餞子歌碑完成知らす西の風・毎日
歌壇の記事を切り抜く

如何ならん家族を背負ふ人なりや
駅のトイレを黙々と磨く

我は変われど花は変わらじ

餞子歌碑完成知らす西の風・毎日
歌壇の記事を切り抜く

如何ならん家族を背負ふ人なりや
駅のトイレを黙々と磨く